

ムーンメモリア・ロストノイズ
十三話…狩人はその跡を残さず

雨和七瀬

目を改めて、ブランカは勇み足で冒険者ギルドを訪れた。本部の建物の前に立ち並ぶ掲示板の前まで来ると、ブランカは振り返ってユノとルークを手招きする。

「武器屋さんの依頼を探しましょう！ どの辺なんでしょう……？」

ブランカは種別ごとに違う記号の印が押されているのを頼りに、貼り紙を探していく。するとユノは手前側の掲示板へと向かって歩いていく。

「多分こつちにあるんじゃないかな……ほら、この辺に商人からの依頼が並んでんぞ」

ブランカが足を弾ませてユノの元へ駆け寄り、貼り紙を眺める。

「武器屋さんの、ありますか？」

ブランカがユノに訊ねるが、ユノは微妙な顔をした。「オレ、細かい文字読むの苦手なんだよな。目が疲れる」

二人の視線は自然とルークに期待を込めて向けられる。ルークは端の方を探し、左下まで追いやられた哀れな貼り紙を見つけた。

『武器の材料調達：アオガネトカゲの鱗』……これだな

ルークは丁寧に画鋲を外して、依頼が書かれた紙をブランカに手渡した。

「この印の所にブローチをかざせば、依頼を引き受けたことになるらしい。やってみる」

「はいっ」

ブランカは誇らしげにしながらブローチを外し、貼り紙に押印された魔法陣に軽く押し当てた。するとブローチがパチッと音を立てて小さな光を放った。ブランカが驚いてブローチを紙から離すと、ブローチに魔法陣が転写されていた。

「うわっ、えっ、すご！」

「今何が起きたんだよ！」

ブランカとユノはブローチと貼り紙を交互に見ては、その一瞬の出来事に目を丸くした。ルークも興味を持ち、魔法陣を見つめた。

（限りなく弱めた雷魔法だな。音と光は説明できるが、記述内容が単純すぎる。こんな効果を持たせられないと思うが……）

ルークは二人が騒ぐのを窘めながらも、頭では先ほど見た妙技の再現を始めた。

依頼に書かれた『アオガネトカゲ』の棲む清泉の森を目指す道中、突然ユノが足を止めた。

「この先に魔物が居る。魔牛の群れ、五匹くらいか」

ユノがルークに目を向ける。

「五匹も居ると直接の戦闘は避けたいが、かといつて迂回するのも面倒だ。ユノ、いつものように対処してくれ」

ユノは「おう」と軽く返事をする、担いでいた銃を手を持ち替え、慣れた手つきで多めの火薬と大きめの銃弾を込めていく。

「ブランカ、オレが銃を撃つところは見たこと無かったろ」
ブランカが頷くと、ユノはにっこり笑って言葉を続ける。

「じゃあ一頭、群れのカシラを撃って散らすか。危ねえから離れてな」

言われるままにブランカは数歩下がると、ルークに「もつと下がれ」と言われ更に十歩ほど下がる。ユノは後ろを一瞥して二人が距離を取ったことを確認すると、ユノは地面を足で少し整え、立ったまま銃を構えた。

風、そこに含まれる湿気、狙っている獲物の距離と動き、それに合わせて調整をし続ける銃口の向き。最適な条件が全て揃う瞬間を、ユノは引き金に指を掛けたまま探っていた。

ユノが銃を構えてからしばらく動いていないように見えるのを、ブランカは不思議そうに見守っていた。しかし本当にずっと何も起きない。

「ルークさ、もご……」

ブランカがルークに声を掛けようとしたのを、ルークはすぐさま止め、できる限り小さな動きで静かにするよう促した。ブランカは瞬きで返事をして、そっと視線をユノに戻した。

ユノは後ろで起きている事を気に留めず、その瞬間を作り出す。殺気を相手に見せるのはその一瞬、条件が揃って、引き金を引く時だけ。引き金を引いた後は、もう結果が見えている。結果が現実になったことを見届けて、ユノは集中を解いた。

「うし、さっき言ってた通り、一頭は倒して残りは逃げてった」

ユノは軽く言うが、ルークは改めてその技量の底知れなさを思い知った。しかしそれを表に出すようなことはしない。

「助かる。屍肉食の獣や魔物が来る前に通るぞ」

ユノが銃を手でくるくると回しながら歩き始めるのを、ルークは渋い顔をしながら窘める。

「おい、危ないから止めると何度も言ってるだろ」

「ええ、撃つ後は冷やさないと担げないだろ？」

「ぐぬ……」

銃に関する知識、慣例において彼女の右に出る者は居ないとルークは嫌というほど理解している。悔しさに声を漏らすばかりで、それ以上に諭すのをやめた。

しばらく道に沿ってまっすぐ歩いてみると、ルークやブランカにも仕留めた魔牛の亡骸が見えるようになってきた。全体像を掴めるようになった辺りで、ブランカは魔牛の頭に穴が開いているのを見つけた。

「ほ、本当に当たってる……」

ブランカは開いた口が塞がらないといった具合だったが、ルークは魔物の血の匂いに顔をしかめ、鼻をつまんだ。

「これは……処理しておかないとヨロイバチや肉食スライムが寄って来るな。燃やすか」

ルークが手袋の嵌まり具合を調整していると、ブランカがおおおと手を挙げた。

「魔牛って、牛ですよ。お肉とか、食べられたり……」

「やめとけ、何を食べて育ったかもわからない物を食おうとするな」

ルークは間髪入れずにブランカが魔牛に近づきすぎないように間に入った。ユノも「まあそうだな」と同意を示すが、ブランカは口を尖らせた。

「え、魚とかは基本野生、というか天然モノじゃないですか、一緒ですよ」

「魚ア？ あれはもつとダメだ。海の霧に触れちゃったもんは絶対だめだ」

ユノもルークと同じ側に立ち、ブランカを説得するべく肩を掴んだ。

「ルーク、先にやつといてくれ。……ブランカ、お前は忘れちゃったかも知れねえが、黒い霧だけは絶対に触っちゃいけないし、霧に触れたものも触っちゃだめだ」

ユノの先ほどの狙撃と同じ眼光の鋭さに、ブランカは全身を強張らせる。

「黒い霧……」

ブランカは視線を下げ、目を逸らす。

「そう。霧に触れると、触れえ、ると……なんだっけ、魔女がどうたら、魂がどうたら……」

ユノはその先の文言を思い出せず、ルークの方を見る。ルークは大きいため息を吐き、そのせいでずれた眼鏡を直す。

「ユノ、それは伝記風小説の影響で広まった創作伝承の類だ。一時期参考にしていた時期はあるが……あの霧は異界と繋がっているというのが最近の通説だというのを、この前の『異物』調査の前にも話しただろう」

ルークは早口で言い終えると、ユノの返事を待たずにざっくりと解体された魔牛の方へと向き直し、魔法を発動すべく固唾を飲みながら手をかざした。

「其れは炎、光を生み、ただ一つを焼き尽くさん……（フレオラ）」

ルークが丁寧な呪文詠唱を終えると、魔牛だった肉塊は炎に包まれた。火が弱まれば魔力を注ぎ、炎が立ち昇れば魔力を止め、延焼しない程度に調整を続ける。

「美味しそうな匂い……」

ブランカは腹を鳴らしながら呟いた。

「まあ気持ちはわかるけどよ……ミナートに戻ったら肉食いに行くか」

しばらくして魔牛の肉が灰になって散り、骨もボロボロになるまで焼き尽くすと、ずしりと重たかった図体も風に飛ばされてしまう。解体した際に取り除いていた角を、ブランカはあらゆる角度から観察していた。

「何かに使えそうな気がする……ハンコとか」

「じゃあ持っていくか？」

ユノは面白がってブランカを唆す。

「……まあ好きにしろ」

ルークは魔法の調整に体力を使い過ぎて、もう止める気力も無かった。

清泉の森はそこから歩いてほど近い場所であり、三人は早速足を踏み入れた。森に入ると、木々の隙間から水気を含んだひんやりとした風が吹いて三人を出迎えた。

「依頼を確認しよう。ブランカ、覚えてるか？」

ルークがブランカに話を振ると、ブランカは胸を張って答える。

「アオガネトカゲ、ですよね。どんな魔物なんですか？」

ブランカの回答にルークはひとまず満足して頷いて、ブランカの疑問を解消するべく話し始める。

「金属質で硬い、青色の鱗を纏っている雑食性の魔物だ。樹上で果実などを食べながら獲物を待つ習性がある」

ルークはそう言いながら木の上を観察する。折れかけた枝や脱皮殻、最悪糞でも見つけられることを期待したが、そういったものは見つけれなかった。

「木の上に居るときは枝伝いにひよいひよい動いて厄介だけど、地面に降りると硬い鱗が邪魔みたいでのるくるんだよな」

ユノも同じようにアオガネトカゲを探すが、青みがかっている木々の葉に擬態されていると、ユノでも探すのは難しい。ユノは更に耳や鼻を使つて獲物を探そうとするが、鼻には香ばしい肉の香りが流れ込んできた。

「……魔牛を焼いたときの匂いがして、全然分からねえ」

「……すまない」

ルークが浄化魔法を掛け忘れたことを後悔していると、ブランカが彼の裾をちよいちよいと引いた。

「アオガネトカゲって雑食性ですよね、この匂いに釣られたりしませんか？」

ブランカは自分の服の匂いを確認し、意味ありげに頷いた。ルークも自分の服の袖を嗅いでみると、野営で肉を焼いた時のような薫りがした。

「なるほど、どうやるつもりだ？」

「私が引き付けます！」

「駄目だ」

ブランカは待つてましたと言わんばかりに胸を張るが、ルークはそれをピシヤリと撥ね退けた。

「危ないだろ？」

ユノもルークに続いてブランカを宥める。

「じゃあ服をどこかに置くのは」

「倒す頃には服がボロボロに引き裂かれているだろうな」
あまりに素早く難点を突かれるものだから、ブランカは頬を膨らませて黙ってしまった。

「俺がおびき寄せるか……いや、この足場じゃ無理だな」
ルークは足元の湿った落ち葉を踏みしめると、その圧力がするりと滑って逃げてしまう。

「他に方法……地道に探すかあ」

ユノは弾丸を込め終えると、銃を手に持ったまま森の奥へと進み始めた。それに続くように、ルークはいじけたままのブランカに携帯食のクツキーを見せて誘導し始めた。

段々と日が傾いて、伸びた木々の影が風をより冷たくしていく。ざわめき、揺らめき、風の向き、それらは魔物だけでなく、あらゆる生き物の営みにより乱れていく。

「待て、大きなモンが動いた」

ユノは辺りを見回す。木々の隙間、遠くの大木の上に、横倒しになった鎧のような物が見えた。それはまだこち

らを向いていない。しかし首を上げ、視線をあちこちに移していた。

「……居た」

ユノが銃口を向けると同時に、アオガネトカゲもこちらに目を向けた。ユノは好機を逃さないようにすぐさま引き金を引いたが、標的は別の木へと飛び移って難を逃れた。しかし向こうも狩る者として、逃げずにこちらを見ていた。

「くそ、駄目か」

ユノは軽く銃を冷ますと火薬を詰め直す。ルークは剣の柄を握り、ゆつくりと引き抜く。そしてブランカも武器を構えると、アオガネトカゲが目つきが変わった。魔物は樹上を伝って三人の真上にまで来ると、その威容を見せつけるように見下ろしてきた。そして、その爪の先が動く。

「……来るぞ！」

森の狩人たる蜥蜴は、その硬い爪を獲物に振り下ろすべく飛び掛かってきた。

〈十四話へ続く〉